

2016. 7. 25

No.196



編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

## こつこつ積み重ねて28年—「銀河通信」が196号に



7.21 ニセイカウシュッペ山からの表大雪

1988年7月10日に創刊した「銀河通信」が28周年になりました。こんなに長く続くとは考えてもいませんでしたが、読者に支えられて196号まで発行できたことに感謝しています。

6月は実行委員会を結成して半年前から取り組んできた「吉岡しげ美コンサート」を無事に終えました。会場をいっぱいにすることができホッとしました。また7月15日には、さっぽろ自由学校「遊」の講座「水俣病との出会いから市民運動へ」で自分史を語りました。石狩川の水銀汚染問題の資料は「大雪と石狩の自然を守る会」代表の寺島一男さんから提供いただきました。当時の仲間環境教育に力を尽くされた三浦國彦さん（石狩川・水銀をなくす市民の会事務局長）稲田孝治さん、大山明さん、岡村秀雄さん、杉本裕子さんはすでに故人です。話しているとき、亡き友人たちが「みなちゃん石狩川の水銀汚染のこと、ちゃんと伝えてよ」と言ってくれているような気がしました。会場で「大山明さんをご存知ですか？」と聞かれて驚きました。その方は大山さんと石狩高校で同僚だった方でした。不思議な縁を感じました。

31年前、結婚で札幌に越してきた当時、友人は誰もいませんでした。旭川の友人に近況を伝えたくて始めた通信が、さまざまな市民運動で出会った人たちに読者になっていただき、今では500人を超えています。いつまで続けられるかわかりませんが、7月7日に亡くなった永六輔さんが信念だった「いつも権力の反対側にいたい」を大事に、平和や、反原発、人権を伝えていきたいと思います。

永六輔さんは生前に憲法について語っています。「本来、一般市民は憲法なんて気にしなくてもいい、それが平和な世の中というものですよ。市民が『改憲ハンタイ』なんてデモするのはけっして平和な状況ではない。憲法はあくまで国の舵取りをする政治家や役人つまり為政者を縛るための法律なんであって国民は憲法に縁がなくても、幸せならそれでいいですよ」（「現代」2006年6月号／講談社）

「（99条は）憲法を変えてはいけないという条文です。天皇陛下といえども変えられない。それなのに国会議員が変えると言い出すのはおかしいでしょう」「国民に義務を課すなんてちゃんちゃらおかしいですよ。憲法は国民を守るためのルール。それなのに99条を変えると言い出すなんて、政治家が憲法を勉強してこなかった証しです」（毎日新聞2013年5月23日付夕刊）。この発言を雑誌や新聞などから丹念に拾い、伝えてくださったのは読者の宮下嶺生さんです。毎月、お仲間と今を伝える識者の発言などを集めて、検証しています。今回の参議院選挙の結果について東京新聞や東北の新聞、海外メディアはどう伝えたかなどが整理されて届きました。

朝日歌壇・俳壇から今の社会を映す作品も紹介して下さり、私もたくさん刺激を受けています。そんな一句「国じゃない 愛するのは故郷（ふるさと）の風 土 水と 人のころと」（宇治市・安部知子さん）



# 詩の深さと曲の素晴らしさに魅了！

## 吉岡しげ美ピアノ弾き語りコンサートに180人

6月3日、ようやく吉岡しげ美さんの弾き語りコンサートに漕ぎつけました。実行委員は2時に札幌駅前の六花亭本店ふきのとうホールに集合し設営。吉岡さんは音響スタッフと入念なリハーサルを行いました。

準備からリハーサル、コンサートを写真で紹介します。（提供はコンサート実行委員会。一般の方は撮影禁止ですが、吉岡さんの承諾を得て撮影）



受付準備中



入念にリハーサル



開場を待つ人の列



受付はスムーズに

7時開演。会場はほぼ満席。「良かった」とホッと胸をなでおろしました。

小野有五さんが司会をし、パート1 金子みすゞの世界でオープニング。吉岡さんが「私と小



鳥と鈴と」を歌い始めました。「みんなちがってみんないい」それぞれの個性を認め合う社会になるといいですね。



パート2は「アイヌ神謡集」に寄せて。原田公久枝さん姉妹が歌とトンコリで「銀の滴降る降るまわりに」をアイヌ語で歌



いました。アイヌの自然観が伝わってきてとても素敵でした。

右写真・実行委員の皆さんと吉岡さん

反原発で闘っていらっしゃる科学者の小野有五さんがフランス語で「銀の滴降る降るまわりに」を朗読。改めて詩の美しさに感動しました。シマフクロウの踊りもユーモラスで楽しかったです。



パート3は音楽詩の世界。万葉集より「恋ひ恋ひて」与謝野晶子の「やわ肌・・・」「君死にたまふことなかれ」、茨木のり子の「わたし



が一番きれいだったとき」吉原幸子の「あのひと」、クリスティーナ・ロセッティの「のぞみ」などを熱唱しました。

茨木のり子の詩は何度も読んでいますが、曲をつけて歌うと言葉が深く心にしみ込んでくるようでした。平和の中で生命輝く社会であってほしいと会場の人たちの気持ちも同じだったと思います。

「あのひとは生きていました あのひとはそこにいました ついきのふまでそこにいて笑っていました」と吉岡さんが歌いだすと、あちこちで涙を流す人の姿がありました。私も数年前、急逝した友人を思い出しながら聴きました。

元旭山動物園の園長、小菅正夫さんが大きな花束を渡し、吉岡さんの幅広い交友も知りました。

企画した私も壇上に立ち、「39年



間も女性詩人の詩に曲をつけて歌い続けてきた思いと私が長く続けてきた通信と相通じるものがあります。多くの人に聴いて頂けて感



激しています」と挨拶しました。

コンサートは温かい拍手に包まれて終わりました。



## 今年初の花パトロールは 赤岳（2078m）から



7.9 小泉岳頂上で  
高山植物保護パトロール中

日本山岳会  
が道から委託  
を受けて高山  
植物保護パト  
ロールを行う  
ようになって  
10数年にな  
ります。  
山岳会に入

ったきっかけが1997年の夕張岳の高山植物の大量盗掘事件でした。会では自然保護委員長を長く勤めました。ここ数年、さまざまな市民運動で忙しくなり山に登るのも年、数回に減ってしまいましたが、今年春からまた自然保護委員に復活。官民合同のパトロールの要請があり、思い切って参加しました。

7月9日、午前4時に札幌を出発。8時過ぎ銀泉台の登山口から道庁の自然保護課、環境庁職員、林野庁職



員、山岳会会員など15人で、登りながら下山してくる登山者に「高山植物を守りましょう」とリーフレットを配り、15時半、登山口でパトロールを終えました。



クナゲ、エゾイソツツシなどが満開でした。

盗掘で絶滅が危惧されていたチョウノスケソウも復活。その姿に感動しました。

集合写真2枚は藤木俊三さん撮影



花の写真・上からコマクサ、チョウノスケソウ

## 表大雪の展望台 ニセイカウシュッペ山 (1883m)



7月21日札幌を5時に出発。大雪山系のニセイカウシュッペからアンギラスに仲間9人で登る計画です。

(上写真・アンギラスをバックに)

古川林道は事前に森林管理局の許可を受けました。ところがゲートの鍵がなかなか開かなくて、ハラハラしました。鍵開けに苦闘の末になんとか13kmの林道を車で通過。

登山口を8時25分出発。最初はダラダラと長い登山道を歩きます。ようやく見晴台に着いたのは10時20分でした。高山植物が満開。ウサギギク、ミツバオウレン、ミヤマクワガタ、ハクサンチドリ、シナノキンバイ、

コケモモ、アカモノ、そしてチングルマの群落(右写真)、ウコンウツギ、アオノツガザクラ、エゾノツガザクラ、モミジカ



ラマツ、カラマツソウ、チシマフウロ(左写真)など覚えきれないほど花の宝庫です。

11時ぐらいいは雲が切れて、表大

雪の山々が壮観！思わず歓声が上がりました。黒岳、北鎮岳、白雲岳等々。(1面の写真です)

いつもならニセイカウシュッペの頂上を目指すのですが、今回は初めての挑戦でアンギラスを目指しました。笹やぶを漕ぎ、わずかな踏み跡を辿って進みました。

頂上直下、私も含めて岩登りの経験が少な

い人も多いため、崖を安全に登る事は出来ない判断し、ここまでとしました。お花の写真を撮るゆとりは余りありませんでしたが、大雪のスケールの大きな展望に感動し、往復8時間の長い登山を終えました。



エゾノツガザクラ



## 第2回植村裁判と報告集会開かれました（札幌）



6月10日の口頭弁論では、原告と被告の双方が準備書面を提出しました。植村さん側は約5分、要旨を陳述しました。

その内容は捏造の定義と名誉

棄損を認定した2つの判例を引き、櫻井氏の表現は「論評」ではなく「事実の摘示」である、というものでした。

被告側の準備書面は櫻井氏と新潮社からで、新しい主張はありませんでした。

裁判長は植村さん側に、「被告のどの論文のどの部分が事実の摘示なのか、それがどのように原告の社会的評価を低下させたのか、整理して明らかにしてほしい」と求め、3時15分に終了しました。（植村裁判を支える市民の会ブログより）



報告集会は午後6時から裁判所近くの札幌市教育文化会館（3階研修室）で開かれました。出席者は80人を超え、会場は

満員でした。

はじめに、弁護団の秀嶋ゆかり、成田悠葵の両弁護士が報告と解説をしました。秀嶋弁護士は、「事実摘示の具体的な主張」を裁判長から求められたことについて、「早い段階で論点を整理しようという、裁判促進法に則っている」と、説明しました。

植村さんは、3ヶ月がたった韓国での生活ぶりを、スライドとジョークを交えて語り、参加者の笑いを誘っていました。

休憩をはさんで行われた講演は、北大准教授の玄武岩さんによる「ナショナリズムとメディア」です。玄さんは1時間にわたって、なめらかな日本語で「国益」についての新聞社間の意見対立と朝日新聞バッシングとの関連や、社説の変容の背景を分析した後、「少女像」をめぐる最新の韓国社会のホットな状況を報告しました。

弁護団の報告と解説（秀嶋ゆかり弁護士・成田悠葵弁護士）＝要旨

今回出された櫻井氏側の書面に新しい主張はほとんどなかった。

名誉棄損訴訟は、被告らが「公然と事実を摘示して原告の名誉を棄損したか」どうか争点となる。今日の法廷で裁判長は、私たち原告側に対し、被告らの行為のどこが事実の摘示か、それがどのように名誉を棄損しているか、その理由についても明確にするよう求めた。

私たちは、名誉棄損（という不法行為）をどう考えるべきか、総論的なものは訴状で出しているが、どこが事実の摘示で、どんな損害（社会的地位の低下）をこうむったか、一つ一つ特定して次回までに提出することになる。そこで、この裁判の土俵が設定される。

私たちは訴状に、これ全体が名誉毀損の表現だと書いている。文脈を見ないと分からないが、どこを中核にして名誉棄損だといっているのか特定してくれというのが、今回裁判所から言われたことだ。私たちは「捏造」ということ自体が事実の摘示に当たり名誉棄損性を持った表現だということ、最高裁が名誉棄損についてこれまでどう判断してきたかを含めて、今日の法廷でも成田悠葵弁護士が総論的に説明した。それを踏まえて今度は各論的に、櫻井氏が書いたりネット上で発信した内容のどこが事実の摘示で、それがどう植村さんの社会的地位を低下させたか明らかにしていく考えだ。

櫻井氏は「発表したのは論評であり事実の適示ではない」と一貫して主張しているが、今回も同様だ。それが論評だとしても「真実だったと信じたことに合理的な理由がある」ことを立証しなければならない。

問題は「表現の自由」と違法性の境界はどこかであり、表現の中身と、名誉棄損の程度の問題だと思う。「表現の自由」は憲法で認められているが、人の名誉を傷つける違法な言論活動は保護されない。「捏造」とか「意図的な虚偽報道」は植村さんにとって死刑判決に等しく、名誉に直結している。



植村隆さんの報告＝要旨

韓国に赴任して3カ月経ちました。カトリック大学は医学部などもある総合

大学で、私は文科系が集まる聖心キャンパスの教養課程で「東アジアの平和と文化」を、韓国語で教えています。学生は36人。うち7人は日本からの留学生です。裁判の日程にぶつからないよう、授業（3コマ）はすべて火曜日にしています。

北星学園大学では、新聞を活用した授業をしてきました。新聞は社会や日本を知る「窓」です。関心を持った記事を、留学生たちが切り抜き、発表する授業です。北星では教材は朝日新聞が無料で提供してくれました。韓国でもそんな授業をするつもりでしたが、どうすれば新聞を入手できるかなど、準備は何もしていませんでした。

着任早々の朝。散歩から帰って来ると大学の前で、おばちゃん2人が学生に新聞を配っていました。日本だと日経新聞にあたる韓国経済新聞です。韓国でも学生が新聞を読まなくなっており、無料で配っているという。これはラッキー! 「授業で使いたい。週1回学生に無料で貰えないか」。おばちゃんは携帯電話で新聞社に即連絡してくれ、販売局の責任者と折り合いがつかしました。

ソウルの名門・漢陽大学校で特別講義をする機会もありました。セットしてくれた漢陽大の鄭炳浩(チョン・ビョンホ)教授とは2月、幌加内町朱鞠内 で知り合いました。日・韓・在日の若者たちの集会「東アジア共同ワークショップ」でした。いろいろな出会いが次々に広がっていくことを実感しています。特別講義後の懇親会が大いに盛り上がったのは言うまでもありません。

漫画家の金星煥(キム・ソンファン)さんと再会しました。1950年から50年間、新聞漫画を書き続けてきた人です。李承晩から金大中に至るこの50年は、独裁政権誕生や朝鮮戦争、大統領暗殺などの重大な政治事件、めざましい経済発展から経済危機へ一転するなど、激動の時代と重なります。辛口で辛辣な金さんの風刺は何度も筆禍事件を起こしましたが、いま作品集は韓国で重要な文化財とされています。

私は2003年、その中から約150編を選んで日本語に翻訳、エッセー風の解説をつけた「マンガ韓国現代史」を角川文庫から出版しました。もう絶版です。アマゾンで扱う中古本のレビューは、「風刺漫画を手掛かりに、韓国現代史を庶民の視点から理解するのに最適」と高く評価しています。さらに「解説から、韓国にそそぐ植村氏の愛情の深さがよく理解できる」と書いていました。再会した金さんと増補改訂版を出すことになり、また新しい仕事ことができました。

岩波書店から出した手記「真実 私は『捏造記者』ではない」は増刷が決まりました。また韓国の出版社3社から翻訳の申し込みがあり、歴史書で有名な社から出版されることになりました。すでに翻訳は済んでおり、夏以降に出版されると思います。私のことが韓国でもきちんと伝わることを楽しんでいます。

国連人権理事会の「表現の自由」特別報告者デビッド・ケイ氏が4月来日して、メディア関係者からヒアリングし、私も事情を聞かれました。ケイ氏は暫定報告で日本の現状、問題点を指摘しています。NGO「国境なき記者団」は、言論の自由度で日本を180カ国中72位に後退させており、国連も私の問題に関心を持っています。

不当なバッシングをしてきた産経新聞、読売新聞の報道のインチキぶりを『週刊金曜日』に連載しました。例えば「強制連行」です。名乗り出た元慰安婦のおばあさんについて産経、読売は「強制連行」されたと書きながら、強制連

行と書いていない私を攻撃する、これはでっち上げのようなものです。植村バッシングの一番の問題は、なんでもないことを、私だけを標的にして、集中的に攻撃したことです。それはリベラルなジャーナリズムを圧迫し、委縮させていきます。

事実摘示か論評かについて質問と解説がありました。私の理解では「捏造記事だ」とする証拠があるというのが事実摘示で、「捏造記事だとするのは、私の意見だ」というのが論評です。事実摘示などではないと主張し始めたことで、私が捏造記者ではないということを、彼らが証明していることに等しいと思います。

玄武岩(ヒョン・ムアン)さんの講演  
「ナショナリズムとメディア」=要旨

ナショナリズムは時代によってその様相が異なる。グローバルな状況のいま、ナショナリズムによって対立があおられたり



悲惨な事態が生まれているが、国民国家を生み出した「統合」の役割を果たしたのもナショナリズムだった。

慰安婦報道をめぐる朝日新聞バッシングでは、反日、売国、亡国という言葉が飛び交った。「国益を損ねた」というのが理由だが、何をもって国益というかは単純ではない。新聞社それぞれの国益のとらえ方が変化してきたことは、60年安保以降の各社の社説などからうかがえる。

国益には、国民の生命・財産を含めた安全保障、領土主権、経済利益といった要素が含まれる。その国益も3.11以後は「国全体の利益」を意味しなくなった。国の利益と公共の利益は必ずしも一致せず、ズレが目立つ。もう一つのキーワードは「正義」だ。人権、知る権利、表現の自由といった価値を「国益」の上に置くか下に置くかで、メディアは立場が違ってくる。

朝日新聞をバッシングし、河野談話を骨抜きにした日本政府や右派メディアの次のターゲットは、「慰安婦」少女像だと思われる。昨年末に日韓で「慰安婦問題の解決に向けた取り組み」として財団設立などが合意されたが、日本は(基金出資の)条件として少女像の撤去を求めている。私は先日、少女像をいくつか見てきた。韓国の人たちは、これを守ろうと様々に活動しており、次に日韓の争点になっていくだろう。

その少女像を辛辣に批判している朴裕河教授の著作『帝国の慰安婦』は、非常に多くの問題をはらんでいる。ソウルの日本大使館前



の像について朴教授は「チマチョゴリを着た可憐な少女の姿であり、大多数だった成人慰安婦ではない」「(朝鮮人慰安婦は日本に)協力したという記憶を消し、抵抗と闘争のイメージだけを表現している」「デモの歳月と運動家を顕彰するものでしかない」と批判を浴びせ、結果的に「朝鮮人慰安婦」はないと言っている。

重要なのは、実証的資料と慰安婦の証言の、どちらが歴史として意味があるかということだ。「文書で確認できない」からとか「慰安婦は少女ではないのでは」として日本軍慰安婦の強制性を否定するのは、慰安婦が生きてきた記憶を破壊するものだ。

本の副題は『植民地支配と記憶の戦い』となっている。記憶の選択、再生産される記憶、公的記憶などと「記憶」が多用される。歴史学の重要な研究方法である記憶論は「どのような過去が、誰によって、どのように記憶され、なぜ想起させられるのか」が重視される。少女像に関していえば「像がなぜそうした形になったのか、どんな人々が、どんな思いを込めて作り上げていったのか」という問題である。

慰安婦像は韓国内に33カ所あるが、日本大使館前の少女像のようなものばかりではない。中国人少女もいる像、亡くなった被害者ハルモニ(おばあさん)の胸像、煉獄から這い出ようとする像もある。

大使館前の像制作者が当初依頼されたのは、黒い石に白い文字の小さな碑だった。設置に日本から圧力がかかり、日本を叱咤するハルモニ像に変更したが圧力はやまなかった。「ハルモニが人生を奪われたのは少女の時でしょう」という妻の意見で等身大の今の少女像になった。慰安婦本人が描いた絵や証言に基づいて作られた映画や演劇、アニメなどの作品と同様に、この少女像は作家がそうした証言に共感し、想像力を発揮して制作した芸術作品だ。

哲学者の野江啓一氏は「歴史的証言は、証言者が生きている限りその人の意図から切り離すことはできない。歴史家の叙述に対しその人は絶対的な『否』を突きつける権利を留保している」と述べている。

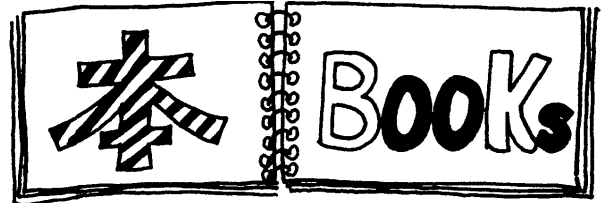
ハルモニたちの証言に基づいた作品はいずれ他界する彼女たちの思い、記憶を形として残してこうと作られたであろう。現在も、生きている人たちの証言を無視して「韓国ナショナリズムの表象として出来上がった像」とする朴教授の非難は妥当ではない。歴史に対して非礼であり無礼だ。

少女像の制作者はこの春、死んでいる赤ちゃんを抱くベトナムの母親「ピエタ像」を現地に作った。韓国軍によるベトナム戦争の被害者だ。韓国でベトナム戦争への評価は定まっていないが、人権、戦争がもたらす被害に社会的な目が向けられている。このことを見ても慰安婦像が単に韓国ナショナリズム、反日ナショナリズムの象徴ではなく、人権、平和、反戦というもっと普遍的な意味を持っている。

(植村裁判を支える市民の会 H. H)

▼玄武岩(ヒョン・ムアン) 北海道大学大学院准教授。1969年、韓国済州島出身。漢陽大学校新聞放送学科卒。東京大学大学院博士課程修了。同大学院情報学環助手を経て2007年から現職。著書に「コリアン・ネットワーク・メディア・移動の歴史と空間」(北大出版会)、「サハリン残留一日韓口 百年にわたる家族の物語」(高文研、共著)、「『反日』と『嫌韓』の同時代史—ナショナリズムの境界を越えて」(勉誠出版)など。

植村裁判を支える市民の会のブログもご覧ください。<http://sasaerukai.blogspot.jp/>



### スノーデン・ショック

デイヴィッド・ライアン著  
田島泰彦/大塚一美/新津久美子訳  
岩波書店 1900円+税

2013年6月、世界を震撼させた一人の若者——エドワード・スノーデン。彼は米国家安全保障局(NSA)によるアメリカおよび同盟諸国の市民監視の実態を暴露しました。

彼の背中を押したものは「管理された社会に住みたいのか、それとも自由な社会に住みたいのか」でした。しかし、私たちは監視されているという実感はあまり持たずに、パソコンを使い、メールしています。

9・11に始まる一連のテロ事件と、SNSの出現という二つの事柄が、監視の実態に大きな変化をもたらしました。私たちがどこにいて、何に興味を持ち、誰とコミュニケーションしているか。ソーシャルメディアの出現と携帯端末の普及によって、これらの情報が、私たち自身の行為により、蓄積されていくことの恐ろしさを明らかにしています。

著者は、監視は民主主義と根本的に相いれないのだと警鐘を鳴らします。スノーデンの告発の意味を深く考察して、私たちはどう生きるべきなのかを提言しています。

私も記事にさせていただいた時、電話番号は公開していないのに無言電話が続いたことがあります。電話帳にはないのに何故なんだろうと、不思議に思っていました。便利に使っているメールやパソコン検索、アマゾンでの買い物などから、どんな考え方を持っているかを見ず知らずの人にもさらしていることを知りました。

望ましい未来を再構築するために著者は、プライバシー保護の重要性を訴えます。「人間が栄えるとは、現在に充足感を感じられる

ことであると同時に、将来がもっと良くなるだろうという希望を持つことができる状態でもある」の言葉に同感です。

著者は、政府と通信企業に説明責任を求め、プライバシーを守るための市民の意識改革を訴えています。

管理社会は息苦しいです。自由と民主主義が守られる社会にするにはどうすればいいのか？スノーデンが命がけて訴えた自由に生きられる社会の構築に、声を上げていきたいと思います。



## たったひとつの「真実」 なんてない

森達也著 ちくま書房 820円＋税

「客観的」で「公正中立」と考えられるメディアだが「絶対的に客観的

で正確な記述は不可能ではないか」と著者は言います。

ニュース一つ取っても、メディアはすべての出来事を伝え切れない。必ず情報の四捨五入が行われ、視聴率や部数を意識した「わかりやすい」ストーリーへと変換されるのだと指摘します。オウムや袴田事件など、具体的な出来事に言及しながら、当時「中立」とされていた報道が実際にはいかなる過ちを犯していたかを検証しています。

佐村河内守さんのゴーストライター事件がありました。長い間、新垣隆さんと共同で曲を作ってきました。難聴であることや、被爆二世であることも全部否定されました。佐村河内さんは、謝罪後いっさいメディアには登場することはなく、自宅を暗くして一日を過ごしています。あの報道があったとき、私も「インチキだったのか」と鶴呑みにしたことを、森さんのドキュメンタリー「FAKE」を観て恥じました。

視聴率や発行部数を支える視聴者・読者自身が情報を自覚的に受け取っていくことの大切さを森さんは訴えます。人の人生を一面だけの情報で社会から葬りさることを残酷さに心止めたいと思います。



## アイヌの遺骨はコタンの土へ

北大に対する遺骨返還請求と先住権

北大開示文書研究会 編著  
緑風出版 2400円＋税

19世紀後半から1970年代まで北海道大学を中心に全国の大学の教授らが、北海道やサハリン、千島列島など各地のアイヌ・コタンの墓地を掘り起こし、大量の人骨と副葬品を研究室に持ち去りました。

アイヌは死者であれ生者であれ、長い間、単なる研究対象でしかありませんでした。頭蓋骨計測研究のブームが去り、残されたアイヌ人骨や副葬品は学内の倉庫に仕舞い込まれたり、散逸し、忘れ去られたのです。しかしそうされた側は、忘れたくても忘れられない。たとえば百数十年が経とうとも……。

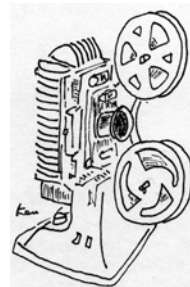
本書は、今も大量の遺骨を保管する北大を相手に返還訴訟を起こしたアイヌたちの闘いを通して、先住権を無視したまま日本政府が進める「名ばかりのアイヌ政策」を告発しています。

原告の一人である小川隆吉さんは、北大に人骨がどのように保存されているのか視察したときの衝撃をこう書いています。「案内されたのは動物実験室です。棚にはエゾオオカミの頭骨が六個、エゾシマフクロウの頭骨が六個。その隣に、動物たちの標本とまるで同じように、人間の頭骨が壁一面に並んでいたのです。この光景を目にしたとたん杉村京子フチは『許してください、許してください、許してください』と三度声に出しました。フチの眼からは大粒の涙があふれていました」と。その怒りと悲しみは言葉にできなかったと思います。研究者に人権意識のかけらさえもなかったのかと怒りがこみあげました。研究機関や政府がいまだに植民地主義から抜け出していないことを如実に語っています。

浦河町杵臼の墓から研究目的で掘り出されたアイヌ民族の遺骨12体について、北海道大学は、7月15日、遺骨返還をめぐる訴訟の和解に応じて遺族らに返還しました。

国の調査では同じように掘り出されたアイヌ民族の遺骨は全国12大学に1600体以上が保管されているといわれます。数の多さに驚きました。訴訟で和解を勝ち取った意義は大きいと思います。

アイヌ民族の人権が今後は守られることを願います。



## 『ペレ 伝説の誕生』

ジェフ・ジンバリスト監督  
マイケル・ジンバリスト監督



「サッカーの王様」ペレが世界を変えた秘密に迫ります。

スラム街でサッカーボールもスパイクもない環境で育ったナシメント（ペレの本名）は手作りのボールでサッカーを始めます。黒人差別の中で父が、マンゴーをボールに見立ててジンバの技を伝える場面が印象的。粘り強い修練を積み、ペレは素晴らしい身体能力で躍動感あふれる技を身に着けるのです。しかし、監督はヨーロッパの洗練された技術を教え込もうとします。その方法ではゴールを成功させることができません。本来の自分のスタイルを信じたとき、奇跡が起きました。ここで描かれるサッカーは映像詩のように美しく、これこそがブラジルの歴史と伝統が培ったものだと感じました。



## 『シチズンフォー スノーデンの暴露』

ローラ・ポイトラス監督



2013年、アメリカ政府が携帯電話やメールなどの通信情報を収集し一般国民を監視していたことが明らかになりました。

この事実を世界に知らしめたのが元CIA職員のエドワード・スノーデンでした。一連の事件のはじまりと真相に迫ったドキュメンタリー。

スノーデンが真実をリークし、名乗り出る直前、監督らは香港のホテルで会います。盗聴を恐れ、携帯の電源は全て切って話を聞くのですが、火災報知機が鳴り出し、ただならぬ緊張感が伝わってきました。

人権を踏みにじるアメリカ政府の横暴に失望した彼の強固な意志を確認したグリーンウォルドは、英国ガーディアン紙に最初のスクープを発表し、すぐさまCNNが速報します。まさに世界に激震が走った瞬間でした。

これによって日本を含む同盟国への盗聴が行われていた事実も明るみになりました。命の危険を恐れず、個人の自由が守られないと告発したスノーデンの勇気が素晴らしい。

アメリカは「9.11」以降、自国の安全のためには、監視が必要だと迫っているのです。日本も秘密保護法が制定され、監視社会が進められています。プライバシーを権力に握られるとき、自由を失うことになります。メディアの萎縮が始まっています。監視社会は嫌だと声を出す勇気を持ちたいですね。

## 『不思議なクニの憲法』

松井久子監督

憲法について「戦争しなくなくてふるえる」を立ち上げた女性や、安保法制に反対するママの会の主婦や、学者、作家、弁護士、政治家など様々な立場の28人にインタビューしたドキュメンタリーです。

毎日の暮らしの中で平和と戦争について考えたり、学んだりを実践している水野スウさん（銀河通信読者）も登場します。

国のかたちをきめる憲法に、誰もがあたりまえに関心を持ち、正しい知識を得てそして理解を深めるために、歴史的事実を重んじながら「意見」よりも日常に根ざした「人びとの声」に耳を傾けます。改憲を許したら私たちの未来はどうなるの？この国の憲法に関心を持ち、理解を深めることができるように構成されていて秀逸。まず学ぶことから始めませんか？

自主上映会には、DVDの貸し出しもしています。



## 『ブルックリン』

ジョン・クローリー監督

1950年代。エイリッシュ（シアーシャ・ローナン）はアイルランドからアメリカ移民の街ブルックリンに移住します。

高級百貨店で働き始めますが、都会にも同世代の女性たちにもなじみません。大学で簿記を学ぶうちに誠実な配管工のトニー（エモリー・コーエン）と出会い、生き生きと洗練された女性に変わっていきます。

姉の突然の訃報で、2年ぶりに郷里に帰ります。緑豊かな自然に安らぎ、ブルックリンで結婚したことも忘れて、地元の金持ちの息子と恋に落ちます。そこにはかつての内気だった少女の面影はありません。アメリカとアイルランドどちらを選ぶのか、私もエイリッシュになったような気持ちで映画に引き込まれました。

未知の世界をさまよいながら、エイリッシュは自分の人生を選び、まっすぐな目で自立していきます。そんな彼女の成長の過程を、まるで順撮りしたかのように的確に演じるシアーシャ・ローナンが素敵です。

『帰ってきたヒトラー』デヴィッド・ヴェンド監督

現代にタイムスリップした独裁者ヒトラーが、彼をモノマネ芸人だと勘違いしたテレビマンにスカウトされ、その力強い



扇動で再び民衆の支持を集めます。ドイツ国内で約250万部を売り上げた人気小説を映画化したブラックコメディです。

アウシュヴィッツでユダヤ人を大量虐殺したドイツでは、徹底的に過去の歴史に向き合ってきました。学校教育の中で、何度も検証しています。それでも、こういう映画が制作されるのは、ヒトラーは私たちの中にもいるということではないかと背筋が寒くなりました。

購読料とカンパをありがとうございます  
います（敬称略）5.27～6.30

仲俣善雄（札幌市）カンパ 林秀起（札幌市）カンパ 中川充（札幌市）カンパも 前原満之（宮崎市）新西孝司（札幌市）カンパ 新妻徹（札幌市）カンパ 大井恵子（札幌市）カンパも 塚本裕子（札幌市）カンパも 亀田法子（江別市）カンパも 及川文（札幌市）木村玲子（札幌市）著書 北嶋節子（横浜市）著書

合計17,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。